

ステークホルダー・ダイアログ 第三回

『環境・社会報告書2011』を読む

新日鉄は、1998年に国内の鉄鋼業で初めて「環境報告書」の発行を開始し、
2005年には「環境・社会報告書」へと改めて内容の幅を広げるなど、
社会とのコミュニケーションにも力を注いできました。
そうした中、情報の発信だけでなく社外の方の意見を聞くことも大切だと感じて、
ステークホルダー・ダイアログをスタート。

2009年、2010年、そして今回の2011年と、環境や生活、
社会について複合的かつ幅広い活動を続けている4名の同じ有識者の方々
にお集まりいただき、当社の「環境・社会報告書」についてご意見を伺いました。

[2011年8月24日 新日鉄本社(東京都千代田区)にて開催]



司会

国際海洋研究所 (IOI)
日本支部 事務局長
大塚 万紗子氏

桂川・相模川流域協議会
代表幹事 環境カウンセラー
河西 悦子氏

東京財団
研究員
吉原 祥子氏

持続可能な発展のための
日本評議会 (JCSD) 事務局長
黒坂 三和子氏

新日本製鐵
環境部長
丸川 裕之

新日本製鐵 環境部
環境リレーションズ
グループリーダー
能勢 大伸

新日本製鐵 環境部
環境リレーションズグループ
マネージャー
篠上 雄彦

情報量が増えていながら 見やすさも増した前半部

黒坂 「環境・社会報告書」について同じメンバーで
意見を交わすのは3回目の節目となります。最初に、
2011年の報告書の前半部分、「トップステートメント」
「経済性報告」「巻頭コラム『鉄の惑星』=地球」「特集：
鉄がつくる、地球の未来」「震災関連記事」までお願い
します。

大塚 前回の報告書から、素晴らしく良くなったと思
いました。表紙をめくった後のトップステートメント
からずっと、快いリズムで構成されていると感じます。
ただ、2010年度の活動報告ではあるけれど2011年7
月までのものも含んでいるとの注記があって、一般の
方たちがこれを読むのは10月頃だということを踏ま
えると、東日本大震災についてはもう少し深い記述
があっても良かったのではないかと思います。特
にトップメッセージでは、今回の震災を新日鉄のトッ

プとしてどう受け止めたのか、どう向き合っていたかという気持ちの部分がもう少し表れていればと思います。

河西 そうですね。3月11日以降、日本の全ての人たちの暮らしが根底から揺らいでいる状況は続いているし、この報告書の発行時期は、新日鉄の企業姿勢をメッセージとして打ち出していくべき段階に入っていたのではないかと思います。

黒坂 産業基盤を支える企業の経営トップに明確なメッセージを期待しますからね。他のページはいかがですか？

吉原 巻頭コラムの『鉄の惑星』=地球』(p4-5)ですが、これと同様の、鉄自体の歴史を宇宙の誕生から現在まで通してまとめたページが昨年の報告書にもあり、私はとても感銘を受けました。それが今回も引き続き掲載されたのは、鉄鋼業や新日鉄を理解する上でも良かったと思います。前半部は、昨年より情報量が増えていながら見やすさは増していて、今回は2009年版と2010年版の良いところをうまく組み合わせたと印象を受けました。

河西 私もこの巻頭コラムは素晴らしいと思っています、次から始まる特集企画の最初のページともスムーズにつながっていると感じました。さらに、この最初のページで示したことを、その後のページで具体的に上げていくという構成で、非常にわかりやすい展開になっています。

黒坂 特集の「いのちと暮らしを支える、ものづくり」

という見開きで、「世界鉄鋼業全体でのCO2削減可能量 約3.4億トン」と、大文字で数字はインパクトのある見せ方です。ただ、この部分と後半の基本報告ページとのつながりがわかれば、もっと理解が深まると思うのですが。

吉原 また、新日鉄グループのことなのか鉄鋼業全体なのか、様々な数字が混在しているのが少し気になりました。

篠上 確かに、すこしわかりにくさがあったかもしれません。

河西 文字の色を変えるなど、デザインの工夫でも解決できたかもしれませんね。

黒坂 『鉄の惑星』=地球』は、壮大な森羅万象の世界と人間のドラマといえるでしょう。宇宙のFeは、46億年前に誕生した地球を構成する基本元素になり、38億年前に生まれた“生命”になくてはならない成分となり、様々な生と死を繰り返して多様な生命形態が現われた中の哺乳類から類人猿をへて進化した人類の頭脳と手を介して、“鉄”として現われました。“鉄”というFeの別な形態で、137億年を経て宇宙に再び戻るとともに、母なる海の森を育てるために海にも戻る、という壮大な物語り。このページには広く深い意味を感じます。

去年と今年で変化がなくても情報を発信し続けることが大切

黒坂 後半の基本報告について見ていきましょうか。

吉原 これは最後にお話ししようと思っていたのですが、今回読んで興味を持ったことが実は昨年の版にもすでに書いてあったりして、ダイアログに3年間参加させていただいて、ようやく自分の理解度が深まってきたことに気づきました。私自身の能力の問題もあるとは思いますが、多くの情報が載っていることもあり、こういう報告書を理解できるようになるのにも、ある程度の時間がかかるのではないのでしょうか。



ですから、このような基本報告は続けることが大切だと思います。

大塚 「去年記載したから今年はまだ良いだろう」ではなく、発信し続けるのは確かに大切です。

吉原 同じ数字でも、昨年と大きな震災があった今年とでは、違う意味合いが見えてくる場合もあります。

能勢 制作側からすると、生産量や排出量など毎年動く数字は記載することに疑問の余地はありません。一方、企業としての取組みなど去年と今年で変わらないものも多く、「同じことを毎年書いても」と悩むことも少なくありませんでした。その点で、今の皆様のご意見は心強いアドバイスになります。

河西 変わらないことを発信し続けるのも1つの姿勢ですね。その部分は大切に守っている、ということが伝わるのではないのでしょうか。

黒坂 今回初めて「エネルギーと資源の循環・環境側面」(p22-23)のチャートに注目できました。昨年版で大きく掲載されていても、他ページに関心があったからでしょう。

篠上 このチャートに興味を持つ方は意外に多いようです。1つの企業体としてこういう図を描ける会社はあまりないのが理由かもしれません。

黒坂 確かに、マテリアル・フローを描ける企業はあるでしょうが、マテリアルとエネルギーの両方を結びつけて描ける企業はそうないでしょう。

丸川 我々にとって、エネルギーの有効活用は事業の効率化に直結するものなので、こういう循環は当然のものと認識しています。それが社外の方に関心を持っていただけるのは、私たちにとっても新しい発見になります。

独自のリサイクルの取組みをもっと意識的に伝えてほしい

吉原 今、黒坂さんが話題にあげた「エネルギーと資源の循環・環境側面」というチャートを見て、私はリサイクルをもう一度考え直すことが必要ではないかと感じました。リサイクルというと一般

的には、例えばペットボトルを回収してリサイクルする、新たなエネルギーコストはかかるけれども資源を再利用するといった印象がありますが、このチャートは新日鉄のリサイクルには2つの面があることを教えてくれます。鉄を生産する過程で生まれる副産物を再資源化してまた生産に投入する循環が1つ。もう1つは、一般家庭から出る使用済みプラスチックや他産業から出る廃タイヤといったものを製鉄所の中にわざわざ持ってきて、それをエネルギーに換えて利用しているわけですよ。自社の中での資源循環と、社会の中で価値が低くなったものを持ってきて製鉄プロセスの中で付加価値を付けて再利用するという2つのリサ



イクルがあって、その循環の意味はもっと研究されるべきかもしれません。自らの業界や会社だけで完結するのではなく、社会や他産業も含めた大きなリサイクル。これは一般に使われているリサイクルという言葉を超えた、もっと大きな意味を持つような気がしています。

河西 特集の「いのちとくらしを支える」でもリサイクルの具体的な活動を紹介していますが(p14-15)、ここにも吉原さんのおっしゃることがもう少し入ると内容が深まりそうですね。

篠上 リサイクルに関係したもので、33ページの一番下にも「鉄鋼業と社会や他産業との資源循環の関係」という図があるのですが、毎年「もう載せなくても良いのではないか」という意見が出て

います。今年は、かろうじて生き残ったわけですが。

大塚 むしろ、もっと強く打ち出していただきたいくらい。これも先ほど話に出た、発信し続けることが大切な情報の1つではないかと思えます。

吉原 私も以前は、工場見学に行っても報告書のこうした図を見ても、なぜ新日鉄さんがリサイクルに熱心に取り組んでいるのか、よくわかりませんでした。地域貢献の一環として、持ち出しでやっているのかなといった程度の認識です。ところが今年の報告書をよく読んで、それは社会貢献でもあるし、自分たちのエネルギー資源としても意味があるから行っているのだとようやく理解できました。

河西 前半の特集部分でリサイクルの具体的な取組みが紹介されていますが、リサイクルには環境リスクも密接にからんできます。そのリスクマネジメントについては基本報告の34-35ページに載っていて、情報が分断されているのが気になりました。このように関連性の強い記事が別にある場合は、特集ページにその旨を記した方が読む人の理解が深まるのではないのでしょうか。

大塚 私はよく周囲から、新日鉄さんが行っている鉄鋼スラグを利用した「海の森づくり」について、安全性は確かなのかと質問を受けます。この取組みの紹介が特集部分にあるのですが、安全性に関しては基本報告の方に載っていてよく調べないと気づきません。こうしたところも関連ページのガ

イドがあれば親切でしょうね。

丸川 私は以前、環境課長を務めていて、久しぶりに環境部へ戻ってまいりました。昨年・一昨年の皆さまからのご指摘を受けて『環境・社会報告書』は、私がいた頃よりは社会の情勢を受けて内容も広がっているように感じました。今日のお話しも大変参考になることばかりで、来年以降の制作に活かしたいと考えています。

黒坂 今の人間は、約60万年前に誕生した当時のヒトと生物的には同じです。アフリカにいた祖先が世界各地に移動を始めた約7年前に手にしていたのは、多分“小さな道具”と“火”でしょう。21世紀の現在と当時との最大の相違は、人間が造り出してきた様々な“人工物”の存在であり、それらと人間の関係性といえます。それ故に、“3.11”を経験した日本人は、“人工物”との関係性において、人類史上の最先端にいると自覚し、歴史的な役割を果たすよう求められている気がします。

私たち4名は、環境・社会報告書に意見を述べるために、Feの特性だけでなく、内外の産業構造、宇宙までも関連して考えるという、本当に貴重な機会をもつことができました。これからも、鉄(Fe)というユニークな素材を生産するリーディング・カンパニーとして、イメージネーションとイノベーションを駆使して前進されますようお願いしつつ、今回のダイアログを終えることにいたします。皆様、ありがとうございました。



国際海洋研究所 (IOI)
日本支部 事務局長

大塚 万紗子氏

聖心女子大卒業後、コロンビア大学修士課程修了(比較教育学)、シンクタンク研究員などを経て、1987年に株式会社インターコムを設立。1999年より国際海洋研究所 (IOI) 日本支部事務局長。また科学技術・学術審議会の海洋開発分科会臨時委員も務める。



桂川・相模川流域協議会
代表幹事 環境カウンセラー

河西 悦子氏

静岡大学教育学部美術科卒業。静岡市立須津中学校教諭、静岡大学教育学部美術科技術助手、都留文科大学非常勤講師などを経て、結婚後は主婦業と市民活動・制作活動に取り組む。桂川・相模川流域協議会代表幹事。また大月森づくり会の代表も務める。



東京財団
研究員

吉原 祥子氏

東京外国語大学卒業(タイ語専攻)。在学中、タイ国立シーナカリンウィロート大学へ国費留学。米レスリー大学大学院(文化間関係論)、米Institute of International Education バンコク支部を経て、現職に至る。



持続可能な発展のための
日本評議会 (JCSD) 事務局長

黒坂 三和子氏

1970年代に発電所立地の社会・環境アセスメント業務を経験後、ヨーク大学環境学大学院修士修了、エール大学教授の日本人の自然観調査補助、1989年から世界資源研究所(WRI) 日本責任者、1996年からJCSD事務局業務を兼務し京都COP3会議への協力等、持続可能な発展の実現に努める。